



Humanity & Nature Newsletter

No.45

November 2013

地球研ニュース



サウジアラビアのメッカ巡礼(ハッジ)には毎年約400万人が訪れる。ホテルに泊まれない巡礼者はテントを張ったり、道端で野宿する。モスクには鞆を持ちこめないで欄干にぶら下げているのだが、残念ながら、持ち主たちの礼拝中にアスカル(モスクのガードマン)によって鞆は捨てられてしまった(2011年11月、撮影:ムティア・アミアミナ)

今号の 内容

P2

特集1●所長と語る

地球研アーカイブスはいかにあるべきか

安成哲三×遠藤愛子×安富奈津子

P5

特集2●プロジェクトリーダーに迫る!
水とエネルギーと食料の連環を測り、
政策につなげる

谷口真人+遠藤愛子

菊地直樹+中川千草

P8

■百聞一見—フィールドからの体験レポート

アフリカの街を地べたから見上げる

清水貴夫

P9

特集3●成果統合のあり方と出版活動
新規学術書の発行にあたって

長田俊樹×草野栄一×鈴木哲也

×阿部健一

P12

■前略 地球研殿—いま、こんなことをしています

次世代における環境問題とエネルギー問題
との同時解決の実現に向けて

松永光平

P13

■所員紹介—私の考える地球環境問題と未来

異分野融合研究の手法で熱帯地域の
人と自然との相互作用を明らかにする

渡辺一生

P14

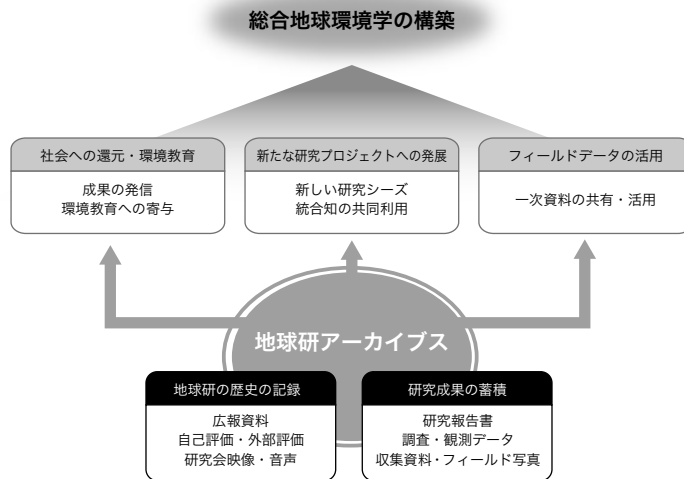
■お知らせ

イベントの報告、研究活動の動向、
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、
イベント情報

地球研アーカイブスはいかにあるべきか

出席●安成哲三(地球研所長)×遠藤愛子(地球研准教授)×安富奈津子(地球研研究高度化支援センター助教)

地球研のさまざまな活動の記録を残し、地球環境学の理解と普及をはかるために設けられた地球研アーカイブス。2008年度に運用が始まり、2013年3月からは地球研のホームページをつうじて一般に公開し、外部からもアクセスできるようになった。プロジェクト方式は地球研の特徴の一つだが、研究プロジェクトの終了にともない研究成果が散逸してしまうという問題がある。膨大な調査・観測データや収集資料、研究成果をどのように蓄積し、活用するか。「地球研らしい」アーカイブスをどのように構築すべきか。システム構築の現状と課題を検証し、情報資源の活用手法などの具体策を議論した



地球研アーカイブスがめざすもの

安富●任期制を基本とする地球研では、研究成果も人とともに流動してしまいます。ですから、地球研の柱となるようにプロジェクトや研究所の研究成果と活動記録をアーカイブしていこうというのが地球研アーカイブスの活動目的です。

安成●私も地球研設立のときから地球研と外から関わってきて、研究成果が地球研に残っていかないことはとても気になっていました。

地球研アーカイブスの活動開始は2008年度ですが、地球研設立が2001年。それまではどうしていたのですか。

安富●要覧や年報、プロジェクトの研究報告書、書籍はほぼすべてアーカイブされています。それ以外のものでも、所全体として重要な記録は残っていますが、プロジェクトの成果物についてはまだ不十分です。安成●研究成果をきちんと地球研にアーカイブすることは、プロジェクトの一つの重要な義務である。それをちゃんと徹底することが大事だと思うんです。

地球研のプロジェクトや活動とおして出てきたデータ、情報はすべてアーカイブする。「こんなデータぐらい」と思えるものも、あとから考えると貴重なデータだということもありますからね。

安富●「総合地球環境学」という、文系・理系

の枠を超えた新しい学問を構築するには、多様な研究成果の蓄積は欠かせないということで、地球研アーカイブスが設けられました。

安成●多くのプロジェクトが、過去、現在、未来と走っている。外部からの地球研の評価では、個々にはいろいろな研究をしているが、「全体としてどのような研究をしているのかが見えない」という大きな批判もある。

地球研も進化していかなければいけない。そういうときに、アーカイブスがあるというのは大きなことです。外への発信もそうですが、内部での研究活動の活性化という意味でも、アーカイブスは重要ですね。

地球研の情報収集窓口はホームページ

安富●遠藤さんは2013年8月から着任されましたね。着任前に地球研やプロジェクトに関する情報を、どのように収集しましたか。

遠藤●もちろんホームページを見ました。10周年を記念して発行された『総合地球環境学構築に向けて——地球研10年誌』は、とても参考になりました。ただし、その書籍情報もホームページから得たので、入り口としてはやはりホームページが重要だと思います。

安富●要覧などもそこからですか。

遠藤●年報やニューズレターもホームページをとおして知りました。

着任後も情報収集のために地球研プロジェクトのホームページを閲覧していますが、地球研のホームページにプロジェクトの紹介があつて、さらに、各プロジェクトが独自にホームページをつくっていますね。プロジェクト独自のホームページはメンバー間の情報共有の場でもある。

ネクサスプロジェクト*1でも、一部のプレゼンテーション資料をプロジェクトメンバーのみ閲覧可能なページに載せています。さきほど所長がおっしゃった「記録を残す、公開することが使命だ」という感覚はあまりありませんでした。

安成●進行中の段階では非公開の部分があつてもよい。しかし、プロジェクトが終了した段階では、すべて地球研アーカイブスに公開して残す。これは大事なコンセプトだと思っています。

プロジェクト間の情報共有に有効な地球研アーカイブス

安成●基幹研究プロジェクトは、これまでのプロジェクトの成果をいかに活用するかが一つの大きな役割です。エネルギーや食糧などを切り口に、これまで地球研のプロジェクトは、なにをしてきたかを考察す

*1 基幹研究プロジェクト「アジア環太平洋地域の人間環境安全保障——水・エネルギー・食料連鎖」

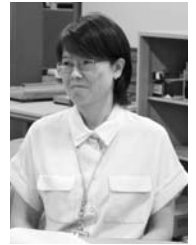
やすなり・つとむ
専門は気候学、気象学、地球環境学。地球研所長。二〇一三年から地球研に在籍



やすとみ・なつこ
専門は気象学、気候学。研究高度化支援センター助教。二〇〇九年から地球研に在籍



えんどう・あいこ
専門は水産経済学、海洋政策学。研究プロジェクトアジア環太平洋地域の人間環境安全保障。水・エネルギー・食料連携共同リサーチ。二〇一三年から地球研に在籍



る必要がありますね。

遠藤●いま、自分たちのプロジェクトのレビューをしています。地球研アーカイブでたとえば「水」と検索するといろいろな情報が得られる。似たような関心をもった取り組みがたくさんあることがわかり、情報交換などに重宝しています。

安成●地球研では、同時に10くらいのプロジェクトが並行して進行しているから、地球研アーカイブを活用することで「地球研全体として、どんなことをしているのか」というプロジェクト相互乗り入れやクロスカットなどを進める役割も大きい。それぞれが自分の仕事に忙しいから、立ち入った情報交換は充分にはできない。こういう現状でアーカイブはやはり便利です。

さらに、電子媒体は保管場所をとらないうえに検索が容易という利点もある。

安富●「水」というキーワードから得られる情報も、地下水の分布、衛星で観測する水蒸気、同位体分析の話から、世界の水分配の話まで出てくるのは、地球研の特徴ですね。

ホームページとの連携には課題が残る

遠藤●プロジェクトをレビューする必要から地球研アーカイブのデータベースをかなり見てきましたが、2008年にスタートして公開が2013年3月と知って驚きました。安富●資料を集める作業はそれ以前から進めていたのですが、公開できる体制が整ったのは最近になってしまいました。

遠藤●プロジェクトのホームページの情報とアーカイブの情報とがつながっていることもあります。しかし、たとえばうちのプロジェクトのプレゼンテーションはたぶん地球研アーカイブとつながっていない。これからはこういう活動をアーカイブと連動させる必要がありますね。

安富●いまは定期的にすべてのプロジェクトのホームページを巡回して、手作業でつないでいます。(笑)

先日も地下プロジェクト*2のホームペー

ジに地熱や熱量分布など研究成果をわかりやすくまとめた画像資料がたくさんあったので、登録させていただきました。

安成●地球研プロジェクトの内容と成果を外にアピールすることも大事。これが地球研は弱い。極端に言えば関心がない。新しい成果を発信することで、地球研が全体としてなにをしているかを伝える努力をもつてはなくてはならない。

遠藤●ネクサスプロジェクトでは、調査をしたら必ず、報告書を写真入りで書いてもらい、それを逐次ホームページにアップする計画です。

これまではそういうデータをプロジェクトのメンバーの情報共有という感覚でしか記録してこなかった。

安成●プロジェクトとして必要な情報ですが、それで留まってははいけません。

遠藤●プロジェクトの記録・情報がアーカイブに登録されれば、プロジェクトとしての問題意識や課題、最終報告にいたる経過が時系列に理解できますね。

データのインベントリは「地球研らしい」アーカイブ構築のカギ

安成●ところで、観測データなどは、どのような形で蓄積・公開するのですか。

安富●基本的には、エクセルやCSVなどの数値、地図類はグーグルアースやGISで読めるものを保存しています。考古系のデータベースもいただいています。

安成●こういうデータは数字だけ並んでも意味がない。データインベントリ(観測項目・位置・期間や所在情報)の資料もつけていないと。

安富●それを確認して情報を集めるのが私の仕事になっています。詳しい説明がなく、ほぼ自分が使っていた作業用のファイルのまま渡されたりすることもあります。

安成●データを集めるときに、不十分な情報しかないのですかね。

安富●作成者はどのようなデータかわかってはいますが、データインベントリを足す作

業は自分のためだけでなく、その資料を使う人のための作業になる。そこまで意識をしていない人もいます。観測データの場合はインベントリがついていることがほとんどですが、文系のデータには説明が十分でないことがよくある。

遠藤●自然科学系は定量的なものが多いが、社会科学系は定性的なものを中心だから、データの説明が難しいのでは。

安富●地球研には、フィールドで現地の人にインタビューしたデータが多くあります。そういうものをたくさん蓄積すると地球研らしいアーカイブになる。

安成●そうすると、みんな活発に協力してインプットしようかということにもなります。

研究成果のアーカイブは、プロジェクト研究の全体を見渡してとりまとめをすすめてゆくことが地球研の研究高度化支援センターの役割として重要だが、プロジェクトを始めた人——ちょうど遠藤さんのようにこれから始める人や各研究員にも、データを出すことを徹底する。あるいは、研究員が成果やデータを出しやすくなるしくみをつくとすんでゆく。

安富●研究員には現時点ではアーカイブのメリットがあまりみえていないのかもしれない。

安成●メリットはすぐにはみえないけれど、システムとしてつくっておけばいい。ウェブ上にデータや情報をアップする欄をつくっておいて、必ず登録する。あとはそれをまとめればいいわけです。ですから、そのシステムの啓発というか理解がひじょうに大事だと思います。

重要なのは人的ネットワークの記録

安富●地球研の問題の一つは、観測データやインタビュー調査などの一次資料を所持している人が若いこと。地球研で集めたデータをもってほかの研究機関に移られる。

一次資料についてはもう一つ問題はあります。理系の人は「専門のデータベースに置いたほうが活用されるし、提供者にもメ

*2 研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」(2006-2010年)

地球研アーカイブは いかにあるべきか

リットがある」と。文系の人は逆に、「自分の研究のために収集したデータだからほかの人には役にたたない」。それぞれ別の理由で、一次資料を地球研アーカイブに提供することに消極的になっている。

安成●たしかに一次資料の扱いはたいへんですね。それならば、さきほどいったインベントリのようなものだけでもあるとよい。かならずしも、すべてが一次資料でなくてもよいかもしれません。

安富●一次資料でないほうが、地球研の独自性が出るかもしれない。

安成●アーカイブの担当としては、各プロジェクトに、現地で観測した気象や水などのデータに関しては、データの収集期間や場所、データ取得者、どういう要素のデータかなどに限定した情報を提供してもらう。

遠藤●だれがなにをしているのかということも、あわせて発信することに意味がありますね。

安富●それ以上は、必要な人がデータ取得者に直接アクセスすればよい。

安成●研究プロジェクトの成果として、「論文を出せばいい」とか「本を出せばいい」という考えもあるけど、それだけではない。それ以外のデータというのがあると——それは10年後になるか30年後になるかわかりませんが、重要になることがある。ですから、逆にアーカイブするほうは、後世に残すデータとしてどうあるべきかを考えなければいけない。

安富●いろいろなものが集まってくると、そのデータをだれがどう使うのかは見えてくる。そういう意味では、一次資料のアーカイブにこだわらなくてもいいような気もしてきた。(笑)

安成●プロジェクトの日記に「だれが、どこで、なにをしたか」、「どういう観測をした、どういうデータをとった、どういう人とインタビューをした」という記録を残しておく。これは重要だと思います。

遠藤●そういう記録を公表することはまったく考えていませんでした。



研究プロジェクトの情報をキーワードで横断検索

- 地球研の研究プロジェクトの情報や研究成果を知りたい
- 市民へ向けた成果発信や環境に関する情報を知りたい
- 環境教育に役立つ資料を探している

地球研アーカイブ

- 要覧や年報での成果紹介
- 研究成果報告書
- 収集した資料
- 観測データ
- 地球研市民セミナーや地球研フォーラムなどの配付資料、映像
- 地球研叢書やニュースレターなどの刊行物
- プレスリリース、新聞記事
- 広報資料
- 大学での環境教育のための教材
- 小・中学校、高等学校での出前授業や研究紹介の資料

地球研アーカイブの活用法

安富●地球研プロジェクトの人的ネットワークや、どの国のだれとコンタクトをとったかなどの記録が役にたつのですね。

安成●ええ、観測や調査するときは現地の機関にコンタクトして了解や許可をもらう。そういう経緯は記録に残してほしい。次の人にはとても便利です。

情報の一元化をキーワードに

遠藤●いま海外とリサーチ・コントラクトを結ぼうとしています。地球研がどの国とどんな契約を結んでいるのかをアーカイブで公開してほしい。

安成●事務書類の扱いは、一定期間を過ぎると廃棄処分することになりますから、研究協力課に頼んでPDFだけでもつくっておく必要がある。

遠藤●MOU (国際交流協定) は研究協力課で、RC (研究協定) は財務課の担当。情報を一元化してほしい。それに、海外との協力関係は、アーカイブの一覧に載せてもいいのではないですか。

安成●プロジェクトの実施にあたって、外国との交渉経過の資料の蓄積があったらぜひぶん楽ですよ。

遠藤●楽ですね。すぐそこによそのプロジェクトの蓄積があつて聞きに行けるといいのが、地球研ならではの。

安成●アーカイブのイメージができました。たいへんな仕事をしていただいています。やはり重要な仕事です。

遠藤●最近、会社や大学など縦割りの組織内で情報を一元化する動きがありますね。前の職場でも取り組んでいました。情報の一元化は、まだはじまったばかりです。

安富●「情報の一元化」というのは大事なキーワードですね。

遠藤●収集して、シェアして、それをどう公開すればもっと使ってもらえるか。

安成●それをアーカイブで同時にやってくださる。一元化して残ることでアーカイブになるわけですね。

遠藤●だれに聞いたら、自分がほしい情報がどこにあるかわかる、これがアーカイブの第一歩ですよ。

安成●その基礎がプロジェクトの軌跡のような活動記録となる。ぜひ、日本の学界における模範的なアーカイブにしてください。

2013年9月5日 地球研研究高度化支援センター 会議室にて

地球研アーカイブの利用案内

地球研アーカイブ・データベース

<http://archives.chiky.ac.jp/archives/>
地球研ホームページから
(データベース)をクリック

◆出版物、報告書、CDなどの現物資料は図書室の地球研アーカイブ閲覧コーナーに配架しています。
*所外からの図書室内の資料の利用については、利用手続きが必要です。

◆地球研のデータベースとしては、所員が世界各地のフィールドで撮影した写真などを収録している「映像資料データベース」も利用可能です。

プロジェクトリーダーに迫る!

水とエネルギーと食料の連環を測り、政策につなげる

研究プロジェクト「アジア環太平洋地域の人間環境安全保障——水・エネルギー・食料連環」

話し手●谷口真人(地球研教授)+遠藤愛子(地球研准教授)

聞き手●菊地直樹(地球研准教授)+中川千草(地球研プロジェクト研究員)

私たちが暮らす環太平洋造山帯は、地震や津波などのリスクをかかえるいっぽうで、それを補ってあまりある恩恵も享受している。谷口真人教授が率いるこのプロジェクトでは、リスクとベネフィットのトレードオフ関係にある(水、エネルギー、食料)を連環としてとらえ、統合指標のもとにバランスをとることで人間環境安全保障を高めようとしている。プロジェクト発足の経緯、実現のための手法、政策提言まで視野にいたれた成果還元のある方について、リーダーの谷口真人教授と共同リーダーの遠藤愛子准教授にうかがった

谷口●「循環型社会」や「低炭素型社会」、「共生型社会」などが提唱されていますが、基幹研究プロジェクトとして、「セキュリティ型社会」という未来のあり方をめざすにはどうすればよいかを探っています。その際、Human SecurityやEnvironmental Securityなどを統合して、Human-Environmental Securityというかたちで出したいと思っています。

人間環境安全保障とはなにか

菊地●セキュリティに「安全保障」というこの言葉をあえて充てて「人間環境安全保障」とした意義、そこに込めた思いを教えてください。

谷口●セキュリティという英語と「安全保障」という日本語のニュアンスとはたしかに違いますが、地球環境問題の最終的なゴールは、持続可能性や人間の豊かさ・幸福であると考え、そこに到達する道の一つとして、私たちはセキュリティを設定しています。水、食料、エネルギーの自給率を安全保障の項目に入れていきます。

いっぽうで、私たちの住んでいる場所の特性を活かしたプロジェクトにしたいので、環太平洋造山帯(Ring of Fire)のエリアでセキュリティを捉えたいと考えています。この造山帯には地震や津波などたくさんのリスクがありますね。それでも、それを補って余りあるベネフィットや恩恵があるから、この社会が成りたっているの

ではないかと思います。

私たちは、リスクがあつて、そのインパクトがあつても、レジリエンス(回復力)を強めることで、こうして生きている。このプロジェクトでは、このような視点を大事にしたいと考えています。

水とエネルギーと食料の連環を明らかにする

中川●「人間環境安全保障」をとらえる枠組みを教えてください。

谷口●私たちが焦点を当てているのは、水とエネルギーと食料との連環、ネクサスです。この三つは個別で扱われがちですが、じっさいは相互作用やトレードオフ(二律背反)の関係にあります。このことを考え、水とエネルギーと食料を「連環として捉えることで統合しよう」としています。

菊地●トレードオフと連環という発想に至った経緯を教えてください。

谷口●一つは、2011年の3.11です。陸と海とは人やモノをとおしてつながっているにもかかわらず、陸は陸、海は海だけで管理されている。地震と津波で分断されて、あらためてどうすべきか、どう回復するべきかという問いが突きつけられた。たとえば、陸の栄養塩とか物質は海に流れて、海の生態系を維持し、水産資源を養っています。しかし、14mを超える高さの防潮堤をつくれれば、陸と海とが遮断されることは目にみえている。堤防はリスクを抑えるが、陸と海の連環を断ち切る面もある。そうではなくて、分断によるリスク回避と連環によるベネフィットの獲得をどのようにバランスさせるか、その問題意識がきっかけの一つでした。この先にレジリエンスという視点があります。

もう一つは、福島原発とエネルギーの問題です。われわれはどういう再生可能エネルギーを優先的、あるいは選択的に使うべきかという問いが環太平洋造山帯というエリアを設定した理由です。

環太平洋造山帯には地震や火山噴火のリスクはあるが、地熱エネルギーというベネフィットもあります。日本の利用可能な地熱エネルギー量は世界で3位くらいですが、開発量では8位くらい。その理由の一つは水資源としての温泉産業と、エネルギー資源としての地熱開発との競合です。菊地●コモンズとしての地熱を考えると、これまでと違う視点が必要になりますか。谷口●水資源、エネルギー資源、食料資源のそれぞれがコモンズと考えたいのですが、それらを管理する方法が確立していません。地熱エネルギーにしても、だれが管理し、だれが責任をもつのかという、コモンズの問題が同じようにある。

温泉は、温泉組合のような小さな規模で管理されています。そこに地熱開発企業が外から大資本を持ち込むことは、占有権を犯す巨大なステークホルダーが入ってくることを意味します。

遠藤●温泉は温泉法という法律で管理されていますが、地熱開発との競合を想定していませんでした。環境省が温泉資源保護に関する地熱発電ガイドラインをつくっています。

(次ページに続く)

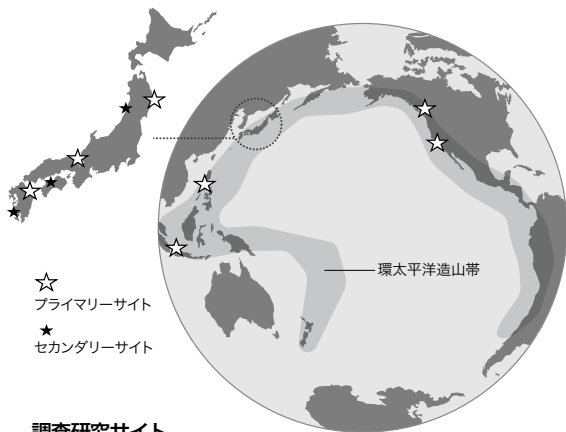
Kickoff meeting集合写真(2013年7月)



水とエネルギーと食料の連環を測り、政策につなげる

研究プロジェクト「アジア環太平洋地域の人間環境安全保障——水・エネルギー・食料連環」

編集●菊地直樹



調査研究サイト

ステークホルダーとともに指標をつくる

遠藤●セキュリティをどのようにはかるかという指標を決めています。

中川●その指標をつくるデータ収集の手法をどのようにお考えですか。

谷口●自然科学的なデータと、社会的なデータとでは収集の手法はかなり違います。自然科学的なものには、水、エネルギー、食料のそれぞれに異なる手法があります。とくにこのプロジェクトでは、沿岸を強いターゲットにしている、陸から海に流れる水が運ぶ栄養塩が沿岸の水産資源を養っていると考えています。ですから、陸と海のつながりを、川の水だけでなく地下水でも評価します。

陸と海のつながりを示す生物的な指標には、アマモもあります。水質も陸と海をつなぐものです。じつは、貝殻のストロンチウム同位体を測ると、その貝が地下水の影響を受けた環境で生きたのか、川の水の影響を受けたのかもわかるのです。

また、社会的な指標の一つに、経済的な評価があります。たとえば、トレードオフがあると、「このオプションをとると、経済的にこう評価できる」ということがある。コスト・ベネフィット分析だけでなく、トレードオフの経済評価を入れようとしています。

もう一つは人間行動解析です。ただ、これをどう指標に落としこむか、まだ悩んでいます。従来のインタビューやグループインタビューで実態がわかるのか。たとえば、オプションを知らない状況で選択する

場合と、「この場合はこうなりますよ」とオプションを提示したときとでは、選択行動はおそらく違うでしょうからね。まず調査サイトの一つである福井県小浜市で先行的にステークホルダーの会議をしていて、どのような変化を起こすかなどを観察しているところです。

菊地●具体的に社会にはいりこんで、プロジェクトの活動そのものも評価する実践的な方法ですね。

谷口●ええ。たとえば小浜市は雪がたくさん積もり、雪掻きがたいへんなので、地下水で雪を融かすシステムを取り入れています。そのシステムを設置してほしいという要望がどんどん大きくなって、現状の地下水で足りるかどうかが心配になりました。そこで調査をはじめ、地下水が足りなければダムをつくらうという話まで生まれました。しかし、そうすると小浜市の水道料金は2.5倍になる。

では、どちらを選択するのか。そのような枠組みで最初からステークホルダーの人たちに加わってもらったのです。地下水の使用は水産資源にも影響するので、水産加工の人たちにも参加してもらいました。

国やリージョナル・レベルでの政策提言まで見据える

谷口●政策提言を出す前には、統合指標や統合モデルをつかって、将来予測をしようとしています。

遠藤●統合マップもつくりようとしています。

菊地●統合マップというのは？

遠藤●日本では七つの省庁が水を管理しています。また、沿岸域は、海岸法に基づいて、四つの省庁が管理している。陸と海とはつながっているのに、複数の省庁がエリアも対象も違って管理している。それを、「一つの地図にのせて見やすくしよう」というのが出発点です。

河川や海岸保全区域は国交省水管理国

土保全局、漁港は水産庁、港湾は国交省港湾局で、諫早湾などの農地海岸は農林水産省。法律を根拠にエリアが決まっている。だから、地下水が漁港区域に出ていれば、管理主体は水産庁になります。やはり、共同で管理するシステムが必要で、そういうものも提供できれば……。

谷口●いま、水循環基本法が議論されています。これは理念法で、現在さまざまな省庁により管理されている水管理を統合して管理しようというものです。具体的にはこれからののですが、このプロジェクトの成果をそれに反映させたいと思っています。

遠藤●2007年に制定された海洋基本法と、翌年の海洋基本計画では、陸域と海域を総合的に管理しようと「沿岸域の総合管理」という新しい取り組みが規定されています。とはいえ、縦割りからは脱しきれていない。

それに、湧水や海底ゴミのように管理主体が存在しないものをどう管理するかという問題もある。やはり一つの省庁だけでは解決できないし、市民も参加しないといけないだろうから、そういうことにも貢献するプロジェクトになればと思いますね。

菊地●海洋となると広域的なステークホルダーになると思いますが、政策提言を考えるときは省庁の人などもこのプロジェクトに関わっているのでしょうか。

遠藤●アドバイザーメンバーというものをつくっていて、水産庁や国交省関係の方にも関わっていただいています。

谷口●水産は、水産資源としてだけでなく、環境や交通、観光などの面もあります。水も水資源としてだけでなく、水環境や文化的なファンクションもあります。それを統合する方法を見いださないといけない。水産やエネルギーに関してもそうです。

それには、国レベルにアドバイザーとして加わってもらうことも必要です。また、東南アジア等のリージョナル・レベルでも、最初の段階からアドバイザーとして加わってもらおうとしている。

菊地●ローカルからスタートして手法をつ



右から
まきくちなほみ

専門は環境社会学。研究プロジェクトは環境形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理。共同リーダー。二〇一三年から地球研に在籍。

えんどう あいこ
専門は水産経済学、海洋政策学。研究プロジェクトはアジア環太平洋地域の人間環境安全保障。水・エネルギー・食料連環。共同リーダー。二〇一三年から地球研に在籍。

たにくち まこと
専門は水文学。研究推進戦略センター連携推進部長。二〇一三年から地球研に在籍。

ながかわ ちゆん
専門は環境社会学、地域社会学、民俗学。研究プロジェクトは地域環境形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理。プロジェクト研究員。二〇一二年から地球研に在籍。

くって、しだいに大きなスケールへと手法をアレンジするのですか。

谷口●ローカルなステークホルダーとの関係は、国レベルやリージョナル・レベルとはかたちが違うと思っている。ただし、最後の出口を考えると、そのことは最初から視野にいられてスタートしないといけな

科学と社会の共創を いかに実現するか

中川●そのあたりが「科学と社会の共創」に関わってくるように思うのですが、そのプラットフォーム、つまり、多様なステークホルダーが集まる場づくりは、プロジェクトを実施するうえで、どのようにイメージされているのですか。

谷口●水に関するプラットフォームは、あるていどできたものを使いつつ、連環としてのプラットフォームをプロジェクトでつくります。そして最後にFuture Earthのような枠組みでグローバルとつなげたい。プラットフォームに関しては、一部はもちろんつくりますが、つくることが目的とは捉えていないんですよ。

遠藤●The Water, Energy & Food Security Nexusという国際会議があるんです。2011年にドイツ政府が主導してプラットフォームをつくっています。2014年3月にはその第2回の会議があるので、そのネクサスプラ

トフォームに加わりた

谷口●そういうグローバルな枠組みで連環のプラットフォームを捉えて、そこにプロジェクトとして関わる。さきほど遠藤さんがおっしゃった2011年に始まったネクサスプラットフォームは、食料の部分のほとんどが農業で、水産はほとんどない。ですから、その点で新しさをだしつつ、ほかのプラットフォームとつながる方向です。

中川●プロジェクト内のチーム編成などについて教えてください。

谷口●ステークホルダーでいうと、大学関係の科学者だけでなく、地方自治体から階層構造のある政府、それに水、水産、エネルギーに関係している産業界。そのように、研究者ではない人たちが最初から参加する構造にしています。

遠藤●このプロジェクトは5班編成で、2班は水とエネルギーの関係を、3班は水と食料の関係を自然科学的に調査するチームです。4班はステークホルダーの分析、5班はその調査結果を集めて指標をつくるチームです。そういう成果を1班が政策に反映させます。そのうえで自然科学的なベースをもとに、グローバルからローカルレベルまで政策提言に結びつけたいと思っています。

いっぽうでは、トレードオフの関係にある水と食料とエネルギーの三角形の指標をつくらうと思っています。日本はおそらく水のセキュリティは高い。でも、食料は自給率が40パーセントくらい、エネルギーも低い。そうするといびつな三角形になる。かといって、食料の自給率を上げようすると水をもっと使う。地下水を汲み上げるにはエネルギーを使う。

もちろん、地域によって要件は違う。ですから、正三角形をめざした政策提言といつても「この三つの資源をどのように効率よく連環させれば人間環境安全保障を最大化できるか」を各サイトで考えるというものです。

菊地●トランスディシプリナリティという視点から、プロジェクトとチームをどのように設計して、どのようにマネジメントしようとしているのですか。

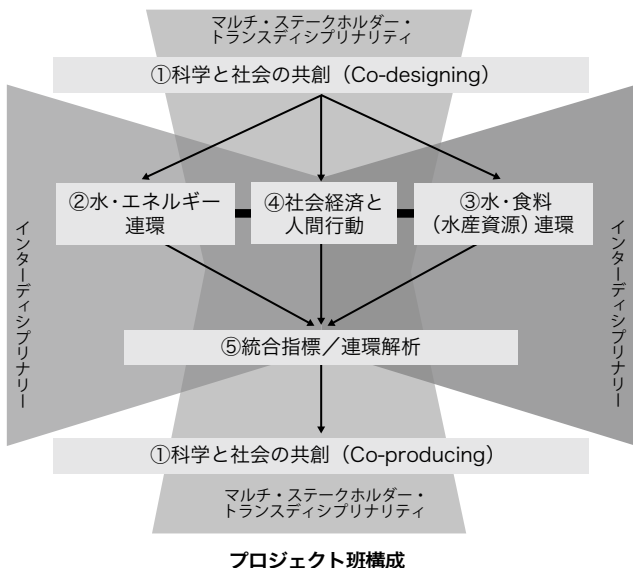
谷口●特徴はプロジェクトメンバーを班構成にしていることです。大きく二つグループがあって、連環をみようとするグループと、それを統合しようとするグループとがあります。そういうかたちでトランスディシプリンも、インターディシプリンもは

いっています。もう一つは、もうすこし広い視点からプロジェクトの方向性をチェックできるよう、班に所属しないようなアドバイザーメンバーを設けていることと、地域コーディネータをおいていることです。こういう構造にしたうえで、トランスディシプリナリティを班構成に最初からとり入れています。

このプロジェクトは地球研の基幹プロジェクトでもあるので、人間社会の生存基盤である水-エネルギー-食料を対象に、地球環境変化に柔軟に対応する社会をめざすことで風水土イニシアティブ*に、また環境負荷の少ない社会をめざすことで山野河海イニシアティブ*に貢献したいと思っています。また、対象を「動くコモンズ」として扱うことで、資源領域と循環領域の両プログラムにも密接に関連します。さらに、未来設計イニシアティブ*において、人間保障、社会保障、環境保障の観点から議論し、従来の循環型社会、低炭素型社会、共生型社会の問題点と限界をこえて、それらを統合する形で「セキュリティ型社会」を提示することで、未来社会のかたちを提示できる可能性があると考えています。

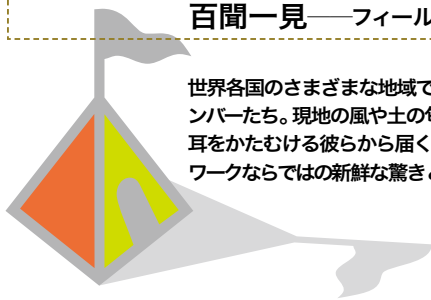
2013年10月15日 地球研「はなれ」にて

*詳しくは、こちらのホームページをご覧ください
<http://www.chikyu.ac.jp/rihn/crd/index.html>



百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



アフリカの街を地べたから見上げる

清水貴夫 プロジェクト研究員

しみず・たかお

専門は文化人類学、アフリカ地域研究。研究プロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト研究員。2012年から地球研に在籍。



西アフリカの「伝統的」な太鼓であるジェンベを演奏するラスタマンたち

私の調査地は西アフリカの内陸国ブルキナファソの首都ワガドゥグ市だ。旧フランス領のこの地域では人びとはそれぞれの民族の言語を使いながらも、フランス語がよく通じる。しかし、ここに通いはじめた当初、旅行者だったりNGO職員だったりした私はフランス語の「フ」の字も知らず、最初の数年間は英語で押しとおした。

ワガドゥグのラスタマン

こんな面倒くさい貧乏外国人を相手にしてくれる人などそれほどおらず、たまに話し相手になってくれたのが、自らを「ラスタマン」と称する民芸品売りの人びとだった。彼らとの出会いである。

ラスタマンは黒人音楽好きの人にはおなじみのレゲエと対に語られることが多い。ラスタファリアニズムという、英米やカリブ諸国で20世紀初頭からさかんになったアフリカ回帰運動を信奉する人びとのことである。

しかし、彼らの多くは、ムスリムの名前

外国人に民芸品を売るラスタマン



をもちながら昼間から酒を飲み、街中でジェンベを鳴らし、民芸品売りとして白人を追いかけ回している。彼らは「アーティスト」を自称するのだが、街の人からはいわゆるストリート・ボーイ（実際はオジサン）とみなされている。誤解を恐れずにいえば、彼らは街の「鼻つまみ者」だ。

しかし、彼らを学ぶことでワガドゥグという街のこと、この社会のことが見えてくるのではないかと直感した。

「たかられる」から「おごられる」に

そのようなわけで、ワガドゥグで調査することに決めた私は、ラスタマンのことを学んでみようと思い、一日のほとんどを彼らと過ごすようになった。私にとっての初めての人類学調査だった。毎日定時にストリートに「出勤」して、私は「骨董品」のマスクの作り方や外国人との商売のしくみを学んだ。

とはいえ、彼らと普通の友人関係がすぐにできたわけではない。この調査を始めたころは、腹が減れば食事をたかられ、どこか痛いと言っては金をせびられる日が続き、一時は外出恐怖症にもなった。

こんなやりとりを続けているうちに、たかられるだけだった関係性は、いつの日か彼らからおごってもらえるようになり、彼らの商売が成立すると、ともに祝杯をあげ、彼らが奏でるジェンベなどのアフリカ音楽を聴きながら居眠りをするようになった。そして、彼らより比較的年長でほんの少し裕福な私には、「貧乏人の友人」、「ラスタマンの父」という称号が与えられた。

街を理解するカギは日常のなかに

自戒の念をこめていうと、アフリカをフィールドにする研究者や援助関係者はどこかで「神の視座」からフィールドを眺めてしまう。「貧者・弱者の視線から……」と

気をつけていても、である。

私たちはかならず「帰る」のであり、好むと好まないにかかわらずここにいななければならない彼らと、同じ立ち位置にはいられない。こんなジレンマに薄々気づきながら、「可能な限り、ラスタマンの目線に近いところからこの街を見上げてやろう」というのが私の試みだった。

ラスタマンの目線から都市や社会を見上げることは、たとえば、彼らがなぜフランス語で会話をし、日本のサラリーマンよろしく、なぜ日々決まった時間にストリートに出てくるのか、などという日常生活のなかの現象を捉えることではないかと思っている。そこに見てとれるのは、いまだ影を落とす旧植民地の影響、資本主義経済の浸透、拡がりゆく格差……といった、しばしばネガティブに捉えられがちな近代化の現象である。私たちはこれらの現象を、不平等で不当な被抑圧者のリアリティだと説明してきた。

しかし、ラスタマンたちはそれに屈しているのかといえばそうではない。むしろ、こうした障害をいなし、避け、ときには利用して、日常を生き抜く術を編みだしていることがわかってきた。それどころか、彼らがラスタマンであることの日常の中に、じつに的を射た政治的主張や独自の文化が表現されていることすらみえてくる。

刻一刻と変化するワガドゥグ。こうした地べたに暮らす人の日常のなかにこそ、ワガドゥグという街を理解するカギがあるのではないかと思っている。



ワガドゥグの兄貴と

新規学術書の発行にあたって

出席●長田俊樹(地球研名誉教授・客員教授)×草野栄一(国際農林水産業研究センター)×
鈴木哲也(京都大学学術出版会)×
阿部健一(地球研教授)

地球研ではこの10月あらたに「学術叢書」を京都大学学術出版会から出版することになった。これを機に、学術成果の発信と出版のあり方について議論した

阿部●学術叢書の2冊、『インダス——南アジア基層世界を探る』と『モンゴル——草原生態系ネットワークの崩壊と再生』が、長田俊樹さん、藤田昇さんたちの尽力で完成しました。きょうは発行のご苦労と反省点をお話いただきます。

『インダス』は人文系の長田さんが研究の目的と文明研究の視点を序章で説いて、さらに最後の14章と終章で全体を総括している。その間を自然系の人たちもふくめてプロジェクトのメンバーが担当する構成ですね。長田●地球研には、地球研が対象にするのは現代の環境問題で、古い時代のことを扱うのは適切ではないという人が多い。私は、過去から現在という連続性を無視して現代を問うのはおかしいではないかと言ってきたが、なかなか理解されずにきた。結果的には、われわれのプロジェクトは多くの成果をあげたが、所内では褒められることはない。地球研はエンカレッジする発想があまりない。人文系に対して寛容ではないし、関心もないね。(笑)

それぞれの手法で地域像を描く

阿部●いっぽう、『モンゴル』の方は自然系。同時期の編集作業でしたが、鈴木さん、両者の性格や構成の違いは……。

鈴木●長田先生の研究は、言語学や考古学、最近の環境調査などのデータをレイヤーとしてGISに重ねて相関をみることでしたね。レイヤーには空間的なものと時間的なものがあって、時間的なデータを組み合わせることで文明の基底がわかるというのは、このプロジェクトの大きなポイントだったし、この手法を地域研究に応用することは今後の主流になると思う。

『モンゴル』の巻は、モデリングとシミュレーション。これまで、「将来の環境がどう

シリーズ「環境人間学と地域」

京都大学学術出版会 A5版上製本

発行の趣旨

地球研はこれまで、和文一般叢書(昭和堂:地球研叢書)と、英文学術叢書(Springer社:Global Environmental Studies)を発行してきた。前者はプロジェクトの成果を一般向けにわかりやすく書き下ろしたものであり、後者は国際的学術コミュニティに研究成果を広く問うたものである。

今回、三つめの叢書として、京都大学学術出版会から地球研和文学術叢書の『環境人間学と地域』を刊行する。「環境人間学」という専門分野を超えたあらたな学問の構築という、先行する二つの叢書にはない、あらたな役割を担っている。対象とするのは、学際的研究に関心のあるすべての人びとである。

『環境人間学と地域』には二つの柱がある。一つの柱は、環境人間学の知的枠組みとして「地域」に焦点をあてたものである。地球研のプロジェクトは、特定地域の具体的な課題に、多方面の専門分野を請来して研究を重ねたものが多く、その成果を高度に統合させることになる。今回刊行した2冊がそれにあたる。

もう一つの柱は、地球環境問題の「課題」に焦点をあてたものになる。一見すると地域固有の課題と思われるものも、その根底は同じである。地域的文脈の違いが、課題の表出のありかたに影響している。だとすれば、世界の多様な地域で調査研究を行なっている地球研の研究成果をもとに、地域横断的な視点から課題の本質に肉薄できるのでないか、と考えている。

前者は終了するプロジェクトから、後者はさまざまなプロジェクト間のコミュニケーションから、あらたな企画が生まれてくるのを期待している。

なるか」の議論はしても、エビデンスを示せなかった。モデルをつくるにはたくさんの変数があるが、この本はしっかりエビデンスを示した。データがあればこういうシミュレーションができるので、未来像も描いた。ともに特徴ある巻になったと思う。

阿部●環境問題に関心のある方は、両方とも買っていただかないといけない。(笑)

鈴木●地域に密着した地球環境学の新たな手法を示せたのではないか。これまでの地域研究も元々のディシプリンを越えて地域像を描こうとしてきたが、この2冊は、領



『モンゴル——草原生態系ネットワークの崩壊と再生』

藤田昇/加藤聡史/草野栄一/幸田良介 編著
2013年10月発行 656ページ
定価6,800円+税

本書は、モンゴルの自然と人間社会を一体となった生態系ネットワークとしてとらえ、生態学、水文学、気候学、土壌学、生物地球化学、数理生物学、環境情報学、地理学、農業経済学、文化人類学など多様な分野横断的に解析したものである。自然と遊牧、畜産物価格と家畜数、共有地問題、都市排水や鉱山開発などの地球環境問題を実証的に解明したもので、類書にはない、総合地球環境学研究所の特徴ある成果にもとづく有用な本と考える。

(藤田昇 NPO法人森林再生支援センター)

『インダス——南アジア基層世界を探る』

長田俊樹 編著
2013年10月発行 476ページ
定価5,500円+税

研究プロジェクト「環境変化とインダス文明」の最終成果出版である本書は、考古学、言語学、インド学、地理学、地質学、古気候学、地球物理学、植物学、動物行動学、遺伝学などの多様な分野により超学際的に彩られている。また、各分野での新知見がふんだんに盛り込まれている。邦文出版物でそれらが明記されるのは初めてのことであり、これまでのインダス文明像を一新させている。長田俊樹著『インダス文明の謎——古代文明神話を見直す』(京都大学学術出版会)とあわせて読むとより理解が深まる。

(遠藤仁 地球研プロジェクト研究員)

域を越えた対話、特に理系の方法論が、いっそううまく生きて、地球環境問題の課題に直接関わる地域像を提出できたと思う。

阿部●叢書のタイトルをどうすべきかとずいぶん悩んで、多くの方に相談して「環境人間学と地域」としました。そのうえで、地域研究に歴史のある京大学術出版会と連携したのですが、草野さんは、「環境学をやっていたのに、なぜ地域研究なのか」という違和感はありませんでしたか。

草野●私はもともと農業経済学で、中国の内モンゴル自治区とモンゴルの地域研究

新規学術書の発行にあたって

を中心にしていましたから、モンゴルはモンゴルとしてまとまって満足しています。長田●地球研には地球環境学という新たな学問をつくることに前向きな人たちと、地球環境学という大皿になんでも盛りつけられよと考える人たちがいる。このことは留意しておいたほうがいい。

ただどちらにせよ、「同じ土俵の上でみんなて研究する」ことが大切。文系理系を超えて、他のプロジェクトとコミュニケーションし、理解しようとする姿勢が失われつつあるのでないか。

阿部●招へい外国人研究員のサンデルさんは赴任してすぐに、「阿部、悪いが一言しておく。この研究所のプロジェクト間の連携はまったくない」と。

草野●たしかに、プロジェクト間の行き来がもっと日常的にあればと、いまになって思います。

長田●プロジェクト方式は、自然科学をターゲットにしたしくみ。その自然科学の人がたとえば、『ヴェーダ』を30年間読み続けてきた人文科学の人の知識や理解を、『ヴェーダ』のおかげじゃないか』と言ったのでは、両者の会話はなりたない。

私のプロジェクトの基本方針は「自然系に丸投げしない」。丸投げするとなにか出てくるかわからなくなる。ですから、自然系の人々がアラ湖の底から堆積物を収集するときは文系の人も同行しました。理系の人、文系の人、研究を知らずに、出てきたものの帳尻を合わせるようだと、プロジェクト内部に軋みが生まれますからね。

阿部●本にするときも、プロジェクト運営とは違った苦労があったのではないですか。

長田●本にするのはそれほど難しくなかった。でも、自然系の人には調査の結果しか書くことがないし、文科系の人にはそれを逸脱して、自分の土俵で処理したがる。それを抑えるのがたいへんだった。(笑)

成果を学術書にまとめる重要性

長田●地球研の発表会も、そういう場に

なっているのではないか。私のプロジェクトは『サイエンス』に2回掲載されるなどの成果を挙げた。しかし、最初の評価委員会では5段階評価で、0点をつけた人が5人もいた。そして、いまの評価委員に最高点をもらった。なぜこういうことが起こるのか。

阿部●プレゼンが下手だった。(笑)

長田●それは認める。(笑)しかし、業績などもっと多角的に成果を判断して欲しい。

鈴木●本とジャーナルや論文との違いも、そういうものかもしれない。「全体を通貫して凝視する」という姿勢がないと本にはならない。体系的、総合性が必要です。理系はえてして、目の前の情報をとりあえず発表すればよと考える。たとえば、ある人の実験の初期条件や試料を変えて実験してあるデータが出ると、それだけで論文にすることがある。そこでは、大きなビジョンは必ずしも語らなくてよい。

論文は20人に読んでもらえばよいというが、本はすくなくとも1,000人の読者に買ってもらうないといけない。買ってもらえる読者は、「自分の領域とは直接には関わらないが、おなじ関心のある人」。自分の言葉だけで語ったのでは、関心をもってもらえる可能性のある人に伝わらない。学術成果はジャーナルでよいと思つたらまちがいです。本としてはまとめないといけない。阿部●たしかに、理系の研究者はトップジャーナルに載せることを目標にしがちです。本というのはメッセージでありストーリーですからね。それには体系をつくることからはじめないといけない。

ストーリーを編み上げる難しさ

阿部●同僚のプロジェクトのメンバーの原稿を読んだ草野さんはどうでしたか。

草野●まとめる段になると、たいへんでした。全体として主張することがないといけないし、「読んでおもしろかった」とならないと、こちらもおもしろくない。でも、各執筆者のベクトルはそれぞれに違う。それをまとめてアウトプットするのは、やは

り難しかったですね。

阿部●どうストーリーをつくるかですね。

草野●まさにそこが難しかった。

阿部●若い草野さんは、他人の原稿を読むことで考え方が広がったのではないですか。

草野●生態学の知識がなかったことを思い知らされました。生態学の研究結果を聞くと、植物の根を食い尽くす悪者といわれることが多いやぎだけでなく、ヒツジだって、腹が減れば根っこまで食べることがわかる。こういうこともきちんと勉強しなければいけないと。

鈴木●この叢書も、みんなで議論して方向を決めることになっていたが、もう一歩、二歩議論が足りなかった。対象地域や研究が個別で、しかも一人ひとりがその個別性を大事に考えるから、どうしても足並みが揃いにくくなる。

制作をとおしてみえてきた改善点

鈴木●本づくりの手法としては、魅力ある用語にはグロッサリーをつけたり、本文中や索引ではゴシックにしたりする配慮が必要だった。索引は魅力的なキーワードの集合で、目次と同等です。しかし、索引の項目に掲載されているページの数が多すぎて、どのページを開くべきかわからない。長田●索引を厳選するか網羅的にするかで悩みました。結局、網羅的にしましたがもう一つ工夫が必要だった。

鈴木●各章で本全体の目標について一回は総括すべきです。「この章はなにを意味し、どういう機能をもつか」を明示的にすべきだった。「すべての章がほかの章を3回は引用せよ」という言い方をしますが、それをもっと意識的にしてもよかったです。

阿部●ある章の本全体での位置づけがわかれば、ストーリーが明確になります。

鈴木●さらに詳細なデータや図表は論文で出せるのだから、本では大きな構造や流れを示すことに留めてもよい。

草野●全体のなかで自分が担当する章の位置づけがもうすこしわかっていれば、ス

右から
すずきていす
京都大学学術出版会専務理事・
編集長。編集者として長く地球
研究を担当。
おさだとし
専門は言語学、南アジア研究。
地球研客員教授、名誉教授。
二〇〇三年から地球研に在籍。
あへけんいち
専門は環境人類学、相関地域研
究。研究高度化支援センターコ
ミュニケーション部門長、教授。
二〇〇八年から地球研に在籍。
くろえいいち
専門は農業経済学。国際農林水
産業研究センター研究戦略室任
期付研究員。二〇一〇年から
二〇一一年まで地球研に在籍。



トリーを優先できるかもしれない。
鈴木●しかし、若い人が先生方をコント
ロールするのはたいへんでしょうね。
阿部●編集を「若い人にしてもらおう」とい
う提案に、藤田さんも賛同くださった。
鈴木●「若い編集担当者の指摘や意見は、無
理な要求でも聞け」と、リーダーから執筆者
者に厳しく言ってもらうのがいい。
草野●私も、表現を変更するなどを著者
にお願いしたこともあります。しかし、なん
ともならなかったところもありましたね。
阿部●二つの巻は、プロジェクトが終わっ
てから、あるいは終わりがけてから本をつ
くることになった。早くから本づくりを頭
に入れてプロジェクト内で擦りあわせる
ことも大事かもしれない。
長田●私は、序章と終章を最初に書いて、
みんなに事前に方向性を示しました。
阿部●なるほど。問題設定はこうだ、結論
はこうだぞと。
鈴木●だいたい論集では、「序章を最後に
書く」と先生方はおっしゃる。けれど、これ
は間違い。すくなくとも序章はドラフトで
もよいから最初に書く。そうして執筆者全
員の問題意識を統一したうえで書かせる
べきだと思います。そのうえで、各章の冒
頭か末尾では序章に出てくるキーワード
を引用してもらう。各章は必ずほかの章を
3回引用するだけで、ずいぶん統合した感
じになります。

めざすは「地球」環境学

阿部●叢書「環境人間学と地域」の大きな柱
は「地域」。地域固有の社会・経済・文化・自然・
歴史を理解していないと、地球環境問題の
解決は困難です。システマティックな研究
を進める国環研(国立環境研究所)と違い、
フィールドワークをベースにする地球研
の強みでもあります。

一方で、地域を横に串刺しする共通項、
テーマが必要ではないか。この叢書のもう
一つの柱について議論しましょうか。
草野●われわれのプロジェクトでは、二つ

の地域を対象としていました。サラワクは
森林伐採が進行し、モンゴルは家畜が増え
すぎて草原が劣化する問題を抱えている。
どちらも根底に市場化の影響があります。
市場化をキーワードに串刺しして環境劣
化を考えることができます。
阿部●ほかの地域にも当てはまるかもしれ
ませんね。
草野●市場経済の影響は大きいと思う。
グローバル経済化と書いてありますが、世
界銀行などが入ってきてグローバル化す
る、市場化するという話です。そういうも
のが共通テーマとして考えられます。
鈴木●ほかには、プロジェクトの多くで、コ
モンズやレジリアンスがよく取りあげら
れていますね。そういう資源の共有化とか、
脆弱性と回復力の問題はどの地域でも見
られます。サラワクのように高温多雨で土
壌も豊かな地域とモンゴルとでは、レジリ
アンスは違う。資源の共有、コモンズのあ
り方も違う。だから、生態学、経済学、あ
るいはレジリアンスは防災学かな、そうい
う大きな枠組みでとりあげ、それを横に串
刺しすることは意味があると思う。
阿部●多くのプロジェクトに関わる横断的
なテーマは、コモンズにレジリアンス……。
鈴木●それに栄養。

阿部●エコヘルスですね。
鈴木●草野さんが、「地域を超えた問題が大事
だ」と指摘されたが、シリーズの行き着
く先は、やはり地域間の連関。

阿部●地域を横断する共通のテーマについ
て言及して初めて「地球」という言葉がづく
「環境学」になると思う。

出版に対する意識改革を

阿部●出版委員会としては、本の企画・編
集という貴重な経験を共有できる体制を
整えたいと思っています。

長田●今後も出版を続けるには、所内のイ
ンパクトファクターばかりを追いかける
風潮と闘わないといけない。一般書はイ
ンパクトファクターが低くて点数にならな

いという意識のもとでは、みなさんに力
を入れてもらえない。地球研でプロジェクト
活動をする以上、これは義務であるという
認識にしないと続かないと思う。
鈴木●書く義務以上に読む義務もある。本
で学ぶことがいまは少なくなって、ネット
やデータベースで調べてしまうが、やはり
他人の書いた本を読まないといけない。た
とえば、京都大学東南アジア研究所は、所
員の書いたものは読まないといけない雰
囲気がある。かつては本を読んでいないと
バカにされるという教養圧力があつたが、
いまはそれが無い。読むことを義務化する
のも大事ですね。

阿部●そのうえで、若い人に、編集を義務
化する。あるいは、シンポジウムを企画し
てもらう。編集することも、地球研の義務
にしてもよいかもしれない。

阿部●この研究所には、「地球研」を主語に語
れる人は、じつは少ない。みんな「私のプロ
ジェクトでは」となる。プロジェクトへのロ
イヤリティというかアイデンティティが地
球研よりも優先してしまう。

長田●地球研はプロジェクトが終わったら、
われわれのように職がなくなってしまうわ
けだから、地球研に対するロイヤリティが
あまりないんですよ。結局、地球研を愛し
たって、片思いで終わってしまう。(笑)

阿部●片思いは究極の愛です。(笑)

地球研の成果物がガラパゴス的で日本
の学術コミュニティでは流通しないのな
らば、インパクトファクターの高い雑誌に
出そうということになる。本の出版は地球
研では義務か権利か。そのような議論を乗
りこえて、地球研では成果の一つとして本
を出版することが当たり前だと思う「文化、
伝統」をつくりたい。今回出版した2冊を
手にすれば自分も参加したいと思う人は何
人も出てくるはず。それだけの水準です。
「自分たちのプロジェクトもこういうかた
ちでまとめたい」と思う人もいるでしょう。

この点で、パイオニアの方がたにお礼を
申し上げて、座談会を終わります。

2013年11月13日 地球研「はなれ」にて

次世代における環境問題とエネルギー問題との同時解決の実現に向けて

松永光平（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 特任講師）

高い技術力と専門性をもち、世界のどこへ行っても、異分野の人や現地の人とチームを組んで働けるリーダーを育てること。これが現在の私のミッションです。

産・学・官どの領域でも就職可能な人材を育てるための博士教育改革が、2011年度から始まりました。それが、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムです。この一環として、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科では、「グローバル環境システムリーダーコース」を開設しました。理工学研究科と連携しながら運営しており、所属する学生は、国際公務員になりたい実験物理学者や、環境知識の普及に貢献したいプログラマーなど、さまざまです。

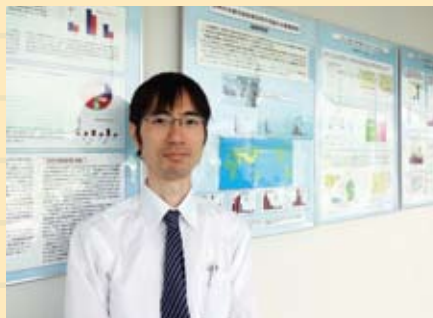
私たちが願っていることは、本プログラムを修了した学生が、環境問題解決のため技術を開発するにとどまらず、それを社会に実装するための政策や制度の整備を支援できる人になることです。その知識や技能を身につける教育を、このコースでは提供しています。

エネルギー資源の利用に伴う環境問題をどう防ぐのか

私の担当する講義は、「大規模環境システム構築法」で、本コースの四つの科目のうちの一つです。発電所やダムなどのハコモノを、環境への影響を低減させながら、社会に受け入れられるような形で建設するにはどうすればよいか、みんなで考えています。2013年度はエネルギー資源の開発-利用-廃棄の過程で発生する環境問題の予防策にフォーカスし、学生はそのための知識や技術を毎回の講義で学んでいます。たとえば、本科目では、気候変動対策の一つとして、太陽光や風力などの再生可能エネルギーの導入の可能性を、期待しうる発電量やコストなど多方面から検討しています。

エネルギー資源の開発-利用-廃棄に伴う汚染問題に取り組む研究基盤が本コースに整備されたのは、2012年でした。これを機に国立水俣病総合研究センター（国水研）との研究連携協力がスタートしました。

2012年7月、現地と本コースとの連携強化のため、私は水俣を訪れました。本コースの教員でもあり、環境省で水俣病諸団体との和解に取り組んだ経歴をもつ小林光教授^{*1}の後押しにより、国水研の関係者をはじめ、多くの方とたに会うことが



国立水俣病総合研究センター水俣病情報センター

できました。私が地球研の中国環境問題研究拠点で拠点研究員をしていたときに学んだ、水俣病のもつ国際的な意味を、身をもって実感しました。原田正純著『水俣病』の中国語への翻訳^{*2}にかかわらせていただいたのが、当時の私と水俣病とのつながりでしたが、現地では水俣病を世界に発信していく熱気にふれることができ、その一端を担うチャンスをくれた中国環境問題研究拠点にあらためて感謝の気持ちをもちました。

国水研とのこの研究連携の目的は、エネルギーの利用段階で発生する地域の環境問題をどう防ぐのかを技術・政策の両面から明らかにすることです。エネルギー不足を解消しつつ、環境を保全しようとするとき、ゆきつづのは「自分さえよければ他人はどうなってもいい」という人間の欲望、つまり地球研でいうところの「人間の文化の問題」です。私は本コースでの研究と指導を通じて、失われた「自分と他人とのつながり」を取り戻すため、共同研究の世界的な輪が広がるよう、微力ながら貢献したいと考えています。

エネルギー分野のオピニオン・リーダーを育てたい

私の担当科目で着目しているもう一つの問題は、発電所をめぐる諸問題です。私の講義では、グーグル・アースを使い、自然災害に対する発電所の脆弱性の評価などに取り組みました。学生たちは、各自パソコンを使いながら、地面の傾斜や地震の強度、海岸からの距離を発電所ごとに計測し、付近の人口密度データと照らし合わせて災害・事故の危険性を評価しました。こうした技術も使いながら、日本におけるエネルギーのベスト・ミックスとはなにかを考えています。

学びの場は大学のなかだけにとどまりません。本コースでは海外潜在のメニューも用意しています。ヨーロッパやアメリカのエネルギー問題研究の対象事例地とその研究を行なっている機関を訪ねて、研究者の指導を仰ぐこともできます。このコースの学生が、エネルギー分野における、世界のオピニオン・リーダーとなることを願ってやみません。

まつなが・こうへい

専門は地域研究。2009年4月から地球研に在籍。地球研中国環境問題研究拠点に参加。2012年4月から現職。

*1 汪永晨「少数服从多数、多数就幸福吗？」『天地人』(18号、14-16ページ、2012年)に小林光氏へのインタビューが記載されている。

*2 中国環境問題研究拠点では中国の研究者と共同で、『水俣病』(原田正純著、包茂紅・郭瑞雪訳、北京大学出版社、2012年)を出版した。

所員紹介 — 私の考える地球環境問題と未来

異分野融合研究の手法で熱帯地域の 人と自然との相互作用を明らかにする

渡辺一生

(プロジェクト研究員)

2013年の春より、東南アジア沿岸域の持続的資源管理をめざす「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」研究プロジェクトのプロジェクト研究員として、地球研に赴任することになりました。本プロジェクトでは、おもにタイおよびフィリピンの沿岸域を対象に、各地域の持続的資源管理手法の提案と小規模漁民の生活の質を向上させることをめざしています。研究対象は生態環境のみならず、その地域の人びとの社会・経済環境にも焦点をあてているのが、本プロジェクトの特徴です。

赴任して8か月ほどが経ちましたが、もともと、農林業分野を専門としてきた私にとって、水産や沿岸環境分野を対象とする本プロジェクトは、まだまだ未知の領域が多い、いわばフロンティアともいえる研究フィールドです。私はこれまで中国、ラオス、タイ、インドネシアで実施してきた異分野融合研究の経験を活かし、この新しい研究フィールドにおいても、熱帯という豊富な資源に支えられた地域に住む「人と自然との相互関係のあり方」について考えを深めたいと思っています。

地理情報学の知見をもちいて 異分野の研究データを有機的に統合する

本プロジェクトにおける私のミッションの一つに、国内外28か所の研究機関に所属する105名のメンバーによって収集された研究情報の集約化があります。

■プロジェクトリーダーからひとこと

石川智士 (地球研准教授)

タイの内陸部で農村の詳細な研究を行ってきた渡辺さんが、東南アジア沿岸域の漁村研究を行なうことで、これまでにない沿岸域の研究が展開されている。また、GISやリモートセンシングの技術をもつ渡辺さんの活動は、物質循環、生物多様性、社会経済、制度や宗教といったさまざまな研究分野の統合を強力に推進してくれている。今後、どのような学際研究を展開してくれるか、とても期待するとともに楽しみにしている。

地球研では、環境問題を考えるさい、人間文化について考えることの重要性を説いています。異分野の研究情報を集約し、統合化された情報を研究分野の枠を超えて分析に利用することは、これまでの重箱の隅をつつくような研究アプローチでは見えてこなかった、人と自然とのさまざまな関係性を明らかにするのにたいへん有効です。

このデータ統合には、自然科学・社会科学・人文科学的な研究アプローチから得られた情報を地理空間に配置し視覚化できる、地理情報学の知見が重要な役割を担います。私は、タイ農村部で行なった異分野融合研究情報のデータベース化の経験を活かし、国内外すべての共同研究者が収集したあらゆる研究情報を相互利用できる、地理情報データベースの開発を進めています。

熱帯地域に適合する エリアケイパビリティー概念の明示

私のもう一つの重要な研究ミッションとして、エリアケイパビリティー概念について明確化するというものがあります。

本プロジェクトでは、私のような農学者のみならず、東南アジア地域をフィールドとしてきた人類学者や社会学者、環境学者、水産学者など学問分野の垣根を超えて、東南アジア沿岸域のエリアケイパビリティーとはなにかについて多くの議論を重ねて

クラブバンクとよばれる生けすの前で、村長(左)と記念写真。資源管理の一環として、網にかかった卵を抱えているカニを選別し、ここで飼育する。孵化した幼生は海に放流される。2013年9月7日、タイのラヨーン県の漁村にて



きました。この議論から、Sustainabilityは、温帯地域の限られた資源をいかに後世まで残し、末永く利用できるようにするかという発想から生まれているので、かならずしも熱帯地域に適した言葉ではないことがわかってきました。

他方、Capableという語は、印欧諸語で「持つ」や「つかむ」を意味するKapと「可能」を意味するAbleから構成されていますが、この言葉は、熱帯地域に住む人びとが自らの生存基盤確保のために複数のオプションやチャンネルをつねに保有し、そのときどきの自然環境や社会環境に合わせてこれらのオプションを組み合わせて使い分けるといふ生き方を適確に表現しています。

つまり、熱帯沿岸域における資源管理問題や人と自然との相互関係について考えるさいには、上述したような温帯地域の環境条件から発想された概念を相対化し、熱帯地域社会特有の性質などを理解したうえで研究を進めていくことが重要といえます。

*

「私の考える地球環境問題と未来」というテーマは、私にとってかなり難しく、すぐに答えの出るものではありません。しかし、温帯地域で精緻化されてきた要素還元主義的な科学と、総合的で輪廻的価値観を有するアジアの思想を融合させることで、多様かつ複雑に絡みあう地球環境問題の解決への道が拓かれるとの想いで、これからも研究を進めていきたいと考えています。

わたなべ・かずお

■略歴 2008年 岐阜大学大学院連合農学研究所修士(農学)取得
2008年 京都大学東南アジア研究所勤務を経て、2013年4月から現職

■専門分野 農学、地理情報学、東南アジア地域研究

■地球研での所属プロジェクト

「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」

■研究テーマ 地理情報技術を用いた異分野融合データベースの構築、東南アジア沿岸域に適合可能なエリアケイパビリティー・インデックスの開発

■趣味 スキューバダイビング、スキー

趣味というほどではありませんが、最近は「地球研バレーボール部」に入部し汗を流しています。加えて、パワーヨガにも挑戦中です。

イベントの報告



10月13日の研究会では、佐渡市多田地区の祭を視察。写真は多田祭の門付けの様子

人間文化研究機構連携研究
「自然と文化」佐渡研究会

報告 島の豊かさ：佐渡から考える新たな社会
2013年10月13日(日)13:00~17:00
(金井能楽堂(新潟県佐渡市))

研究者からの報告、佐渡市からの報告、そしてパネルディスカッションの3部構成で行なった今回の研究会。第1部では門田岳久立教大助教授が「佐渡の〈豊かさ〉とは何か：民俗学の観点から」をテーマに報告。続く杉本浄東海大学専任講師と小西公大東京外国語大学特定研究員は「佐渡と文化・社会運動：観光と芸能の境界線から地域振興を考える」と題し、それぞれ佐渡の豊かさと風土について発表された。

第2部では、渡辺竜五佐渡市農林水産課課長が「世界農業遺産(GIAHS)を活用した島づくり」と題し佐渡市の取り組みについて発表。また、新潟県立佐渡総合高等学校の生徒たちが「能登との交流から佐渡のGIAHSを知ろう」と題し、能登での聞き書きなどを含め、自分たちの取り組みについて発表を行なった。緊張しながら話す高校生たちに、会場の参加者も熱心に聞き入っていた。

最後の第3部では、小松和彦国際日本文化研究センター所長の「善知鳥」の謎ー伝説と灯籠系山車の文化をたどるー、高野宏一郎前佐渡市長の「離島から日本の未来を考える」、木部暢子国立国語研究所副所長からは「ことばは文化。消えゆく方言について。」の3つの話題提供があり、そのあと報告者らによるパネルディスカッションが行なわれた。

行政関係者、地域住民、研究者など約100名の参加者があり、島の豊かさを考える充実した研究会となった。(木村文字)



表彰式でLLDA長官のアコスタ氏(左)から記念の盾を受け取る嘉田良平教授

受賞

地球研がフィリピン政府より
第1回「湖の魂賞」を受賞
(2013年10月4日)

研究プロジェクト「東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計」(プロジェクトリーダー：嘉田良平地球研教授)を実施する地球研に対し、フィリピン政府より「湖の魂(Diwa ng Lawa)賞」が授与されました。

この賞は、フィリピン大統領直轄機関であるLLDA(ラグナ湖開発公社)長官から授与され、同社が掲げる「湖の生態系バランスを取り戻そう!」という目標に貢献し、社会的インパクトを与えた活動・組織に対して贈られるものです。

岡本侑樹プロジェクト研究員と佐々木タチプロジェクト研究員がシステム農学会より
奨励賞を受賞(2013年11月2日)

岩手大学にて開催されたシステム農学会秋季大会において、研究プロジェクト「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」の岡本侑樹プロジェクト研究員、「砂漠化をめぐる風と人と土」の佐々木タチプロジェクト研究員が、システム農学会奨励賞を受賞し、記念講演を行ないました。この賞は、農学関連分野(システム農学)において優れた研究を行ない、今後のさらなる研究・発展が期待できる若手研究者に贈られるものです。



岡本侑樹
プロジェクト研究員



佐々木タチ
プロジェクト研究員

門司和彦名譽教授がラオス総理大臣より
友好メダルを授与
(2013年10月17日)

門司和彦地球研名誉教授(現 長崎大学大学院国際健康開発研究科)に対し、ラオスにおける環境保健分野での長年の貢献を称え、ラオス総理大臣より「友好メダル」が授与されました。授与式ではラオス保健省副大臣列席のもと、サワナケート県知事より手渡されました。

平成26年度 総合地球環境学研究所
機関連携プロジェクト予備研究(FS)

地球研は、研究者コミュニティから研究テーマを広く公募し立ち上げる「連携研究プロジェクト」と、研究所がイニシアティブをとって立ち上げる「基幹研究プロジェクト」を推進してきました。

今回、新しいカテゴリーとして、地球研が求める要件にしたがって大学・研究機関との協定のもとで共同研究として公募・実施する「機関連携プロジェクト」を行なうこととなり、その予備段階として、機関連携予備研究(機関連携FS)の公募を開始します。機関連携プロジェクトの形成は、1年ないし2年の予備研究(FS)の後に、審査を経て、その後3年から5年の本研究(FR)に進むものです。FS期間中は年間最大で1,000万円、FR期間中は年間最大で8,000万円の研究費を配分します。

これまでの共同研究にない新しいカテゴリーでの募集であり、地球研との密接な協議を通じてプロジェクトのシーズを発掘し、プロジェクト提案を設計することが特徴です。

詳しくは地球研ホームページをご覧ください

http://www.chikyu.ac.jp/archive/topics/2013/topics_2013FS.html

●問い合わせ先

管理部研究協力課研究協力係

Tel: 075-707-2148

E-mail: kenkyou@chikyu.ac.jp

研究推進戦略センター 担当: 佐藤 哲

Tel: 075-707-2400

E-mail: CRH@chikyu.ac.jp



スーバン・ケオミサイ県知事(右)からメダルを受け取る門司和彦名誉教授

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2013年9月21日～11月20日開催分

開催日	タイトル	主催 (プロジェクトリーダー)	開催場所
9月21-22日	アラブなりわいプロジェクト全体研究会	縄田浩志	地球研セミナー室
9月24日	第2回 南アジアの生業(なりわい)研究会「南アジア型生業の成立」「都市中間層の食生活の変容——インド西部の事例から」	田中 樹	地球研セミナー室
9月24日	「環境観と環境法」セミナー	半藤逸樹	地球研セミナー室
9月24日-10月2日	エリアケイパビリティープロジェクト 「次世代シーケンサーを用いた生物多様性評価研究のためのマイクロサテライトマーカー単離」ワークショップ	石川智士 東京大学大気海洋研究所 分子海洋生物学分野	東京大学大気海洋研究所 分子海洋生物学研究室
9月25日	第92回 地球研セミナー「Molecular Identification and genetic diversity of date palm (/Phoenix dactylifera/ L.) cultivars at InBelbel and Matriouen In Algerian Sahara」	地球研	地球研セミナー室
10月3日	第93回 地球研セミナー「Water Ethics: A Values Approach to Solving the Water Crisis」	地球研	地球研セミナー室
10月3日	地域環境知プロジェクトセミナー「ジオパークで何が起きているか」	佐藤 哲	地球研セミナー室
10月3日	第114回 海洋センターセミナー 「Evaluation of Coastal Environments in Fishery Areas: Batan Bay, Aklan, Philippines.」 「The importance of stereoselectivity in the environmental fate and effects of chiral pesticides.」	石川智士 鹿児島大学水産学部附属海洋 資源環境教育研究センター	鹿児島大学水産学部
10月4日	ERDAS説明会および衛星画像の紹介企画	研究高度化支援センター	地球研セミナー室
10月8-11日	第2回 シベリアプロジェクト国際会議	檜山哲哉	ヤクーツク、サハ共和国、ロシア
10月10日	金子IS「生態農業研究会」	金子信博	地球研セミナー室
10月18日	平成25年度第2回国際研究動向調査報告会	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
10月18日	地球研レクチャーシリーズ TOWARDS A TRANSFORMATIVE SUSTAINABILITY SCIENCE: FUTURE EARTH AND OTHER FRONTIERS IN ENVIRONMENTAL STUDIES 第1回	研究高度化支援センター	地球研セミナー室
10月22日	Future Earth説明会	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
10月25日	地球研レクチャーシリーズ TOWARDS A TRANSFORMATIVE SUSTAINABILITY SCIENCE: FUTURE EARTH AND OTHER FRONTIERS IN ENVIRONMENTAL STUDIES 第2回	研究高度化支援センター	地球研セミナー室
10月27日	エリアケイパビリティープロジェクト第3回エリアケイパビリティー・インデックス研究会	石川智士	東京海洋大学 品川キャンパス
10月29日	CR事業「カザフスタン・シルダリア流域生態資源統合管理モデルの構築にむけたネットワークの創出」研究会	窪田順平	地球研セミナー室
10月30日	第94回 地球研セミナー「Adaptive Co-Management of Community Wastes for Selected Communities in Silang-Sta. Rosa Subwatershed」	地球研	地球研セミナー室
10月30日	第5回 地球研・京都産業大学合同勉強会「アジアにおけるエコヘルズ研究」「中国におけるダム事業と環境ガバナンス」	京都産業大学 地球研	京都産業大学 神山ホール
11月1日	第5回 舟川ISセミナー「熱帯農業三大陸比較」	舟川晋也	地球研セミナー室
11月1-2日	シベリアプロジェクト全体研究会	檜山哲哉	北海道大学
11月7-8日	食リスクプロジェクト国際会議 RIHN-LAKEHEAD COMMUNITY FORUM 2013	嘉田良平 フィリピン大学マニラ校 フィリピン大学ロスバニョス校 ラグナ湖開発公社	ロスバニョス (フィリピン)
11月7-9日	第1回 環太平洋ネクサスプロジェクト全体会議	谷口真人	ホテルアーバンポート (小浜市)
11月8日	地球研レクチャーシリーズ TOWARDS A TRANSFORMATIVE SUSTAINABILITY SCIENCE: FUTURE EARTH AND OTHER FRONTIERS IN ENVIRONMENTAL STUDIES 第3回	研究高度化支援センター	地球研講演室
11月11日	第95回 地球研セミナー「Towards a Cultural Understanding of Water Management」	地球研	地球研セミナー室
11月11日	砂漠化プロジェクト・メ大都市プロジェクト合同研究セミナー「『住まい』と『住まう』——住居のプロキシムス」	田中 樹 村松 伸	地球研セミナー室
11月11日	石川守FS検討会	石川 守	地球研セミナー室
11月12日	第96回 地球研セミナー「UNDERSTANDING MESQUITE RISK DILEMMA AND SOPHISM IN SUDAN」	地球研	地球研セミナー室
11月12日	第4回 基幹研究ワークショップ	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
11月14-15日	地球研研究開発ワークショップ 超学際的サステナビリティ研究: その方法、過程、実践例	研究推進戦略センター	地球研講演室
11月16-17日	奥田FS会議	奥田 昇	地球研セミナー室
11月18日	立入IS研究会「モンゴル地域研究: これまでの成果と残された課題(その1)」	立入 郁	地球研セミナー室

招へい外国人研究者の紹介

王 远 (WANG, yuan)
ワン・ユエン



●所属
中国環境問題研究拠点

- 招へい期間
2013年5月1日～2014年1月31日
- 現職 南京大学環境学部准教授
- 専門分野 環境経済・環境政策

ESPINO, Maria Pythias Baradero
エスピーニョ・マリア・ピティアス・バラデロ



●所属プロジェクト
東南アジアにおける持続可能な
食料供給と健康リスク管理の流
域設計

- 招へい期間
2013年6月1日～2013年12月31日
- 現職 フィリピン大学ディリマン校化学研究所
准教授
- 専門分野 化学分析

VAN DER LEEUW, Sander Ernst
ファン・デル・ルー・サンデル・エルンスト



●所属
研究高度化支援センター

- 招へい期間
2013年9月1日～2013年12月31日
- 現職 アリゾナ州立大学サステナビリティ
研究所前学部長
- 専門分野 サステナビリティ学

イベント情報

詳しくは地球研HPをご覧ください。 <http://www.chikyu.ac.jp>

第55回 地球研市民セミナー

告知 地球温暖化リスクと人類の選択
— 温暖化についてもっとよく考えるための
最新科学知見

2013年12月11日(水)
18:30~20:00 (18:00開場)
(ハートピア京都 3階 大会議室) 聴講無料

2013年9月に発表された気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の新しい報告書の内容をふまえて、地球温暖化問題において人類が置かれた状況についてお話しします。

地球温暖化を放置すれば悪影響のリスクが増し、かといって急激に対策すれば別のリスクが生じます。人類はなんらかのリスクを選ばなくてはなりません。「では、どう選べばよいのか」を皆さんと一緒に考えたいと思います。

【講師】 江守正多 (国立環境研究所 地球環境研究センター 気候変動リスク評価研究室長)

【進行役】 檜山哲哉 (地球研准教授)

※アーカイブ配信用にビデオ撮影を行ないます。

●申込み・問い合わせ先

地球研 総務課企画室
Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106
E-mail: shimin-seminar@chikyu.ac.jp

人事異動

平成25年9月30日付け
【任期満了退職】
門司和彦 (研究部教授)
【辞職】
佐藤洋一郎 (研究推進戦略センター教授)
縄田浩志 (研究部准教授)
平成25年10月1日付け
【採用】
中塚 武 (研究部教授)

編集後記

第45号をお送りします。今号は基幹研究プロジェクトの「プロジェクトリーダーに迫る!」のほか、地球研アーカイブスに関する座談会、今年度から刊行が始まった「地球研学術叢書」に関する座談会を中心とした内容です。研究の統合とともに、大きな課題である成果の保存と発信に地球研がどのように取り組んでいるかの現状報告としてご味読いただければ幸いです。(寺田)

編集委員 ● 阿部健一 (編集長) / 田中 樹 / 鞍田 崇 / 寺田匡宏 / 菊地直樹 / 熊澤輝一 / 林 憲吾 / 内山愉太
バックナンバーは <http://www.chikyu.ac.jp/archive/newsletter/index.html>

第5回 地球研東京セミナー

告知 都市は地球の友達か! ?
— 地球環境とメガシティの過去・現在・未来
2014年1月24日(金) 12:30~15:50
(有楽町朝日ホール) 入場無料

化石燃料や食料資源の大量消費、廃棄物の蔓延など、都市は地球環境に大きな負担をかけています。しかしいっぽうで、都市は文明を育み、知恵や芸術を生み出してきました。問題を解決する方策もつねに都市で生まれています。都市は地球の友か、敵か、どちらなのでしょう。

本セミナーでは、とりわけいま、都市開発に湧くアジアの巨大都市に着目し、地球環境とメガシティとの関係を討論します。「共生する都市」は、都市が地球と友達関係を持続していくキーワードですが、なにと、どのように「共生する」のか。2020年オリンピックを開催する世界最大の都市「東京」にとっても、重要な課題です。

【趣旨説明】 村松 伸 (地球研教授)

【基調講演】 原 研哉 (日本デザインセンター代表取締役・武蔵野美術大学教授)

「人々の覚醒が都市を変えていく」

【講演1】 板川 暢 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程)

「トンボと共に生きる都市空間を考える」

【講演2】 岡部明子 (建築家・千葉大学大学院工学研究科教授)
「ジャカルタのスラムに住んで『建築』する」

【パネルディスカッション】

パネリスト:
原 研哉 / 村松 伸 / 板川 暢 / 岡部明子
司会: 林 憲吾 (地球研プロジェクト研究員)

◆ギャラリー展示

セミナーに関連した展示を行ないます。

2014年1月24日(金)~26日(日)
11:00~17:00 (最終日は16:00まで)
有楽町朝日ギャラリー 入場無料

※1月24日(金)はセミナー終了後、講演者による
ギャラリートークを開催します

●申込み・問い合わせ先

地球研 総務課企画室
Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106
E-mail: moshikomi@chikyu.ac.jp

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊
Humanity & Nature Newsletter No.45
ISSN 1880-8956

発行日 2013年11月30日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室
発行 研究高度化支援センター (CRP)

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。